

1. わがまま姫は傍若無人

一年を通して常に過ごしやすい気候のテセリア王国。

白亜の城と呼ばれる王城で暮らすのは、賢王と名高い王とその娘。民達から慕われる国王と、その国王から誰よりも愛されているこのわたくし。

つまるところ——誰よりも美しく育ち、誰よりも尊い存在であるわたくしが、この国の王女なのであった。

よってわたくしは、誰よりも何よりも尊重されるべき人間なのである。——はずなのに。

『分かっていない』者達は、意外と多い。

「いた……っ!? あなた、なんてことをなさるのっ!?」

櫛に髪を引っ掛けて痛くするだなんて信じられない。

わたくしは勢いよく立ち上がり、後ろに立つ侍女を強く睨め付けた。

「ひっ！ 姫様、もうしわけ」

「謝って許されるわけがないでしょうっ!? 『このわたくし』に、危害を加えたのよ……!」

怯えた顔をして、慌てて頭を下げてもやったことは変わらない。

わたくしは腰に左手を当て、右手でビシリと部屋の出口を指した。

「出て行って！ お前の顔などもう二度と見たくないわ！」

「姫様、そんなっ!……、……いえ、申し訳ございませんでした」

一度は食い下がろうとした侍女であつたが、すぐに諦めたように頭を下げた。

わたくしが腕を組んでツンと顔を背けていると、彼女はてそそくさとこの寝室から去っていく。

（どうせ、解放されて嬉しいとでも思っているのでしょう）
静かにドアが閉まる音を聞いて、わたしは椅子に座り直す。
ドレッサーの大きな鏡には、スンと表情を失くした自分の顔が映
っていた。

目を眇めて自分自身と目を合わせ、やがてどうでも良くなる。
目を伏せて顔を鏡から逸らし、わたくしはフンと鼻を鳴らした。
そしてすぐに、わたくしの意識は部屋の外に向く。
きつとあの侍女は、喧しく騒ぐことだろう。

そしてその話はすぐに人伝に広がるのだ。本当に、すぐに。

（だから、これできつと——）

お行儀悪く頬杖を突いて、わたくしは窓の外を眺める。
やりたいことなんてない。だからただ、待つだけだ。

そうしてわたしは一点を見つめたまま、ほとんど身動きもせずに

同じ体勢を続けた。

起きてすぐの出来事だったから食事もまだだが、空腹は感じなかった。

ざわざわとした声や物音が遠くから近付いてきて、わたくしはパツと頬杖の体勢を解いた。

一気に浮上していく機嫌に口許を緩め、慌ててすぐに口角を下げる。

（ドアの近くまで出迎える？でも、それじゃあ可哀想に見えないかも）

いじめられて可哀想な女の子を演出しなければ、同情してもらえない。だからそういった演出は必須だった。

笑うだなんてもつての他。涙だって、見せないと。

カチャリと音を立ててこの部屋の扉が開き、宰相と仕事の話をしているお父様が姿を表す。

宰相は寝室まで、入って来ない様子だ。

（――娘の一大事に駆けつける時にも、仕事の話はやめられないのね）

父が王としてこの国や民をとっても大切にしていることは知っている。だから一秒だって時間は無駄に出来ないのだろうけれど――それはつまり、娘の元へ移動する時間は、無駄なものだということだろうか。

「オーレンシア」

「お父様……！」

わたくしは目にたっぷりと涙を堪えて、実父の元へと駆け寄る。そうして父の胸に飛び込んで、シクシクと泣くのだ。

「お父様、あの女ったら本当に酷いの……意地悪ばかりして、わたくし、わたくし……」

「だがな、オーレンシア……」

肩を撫でて宥めてはくれるが、お父様は何かを言いたげにしていた。

——どうして？いつもみたいに、慰めてはくれないの？

五日振りに会った娘に、もつと言うことが——

「オーレンシア、そろそろお前の侍女を勤めてくれる者がいなくなりそうだと話しただろう？そして今回が、最後のチャンスになるかもしれないと」

「……お父様？ねえ、わたくし……」

本当に、辛い思いをしたの。そう伝えようと顔を上げて、難しい顔をしてわたくしの事を見下ろす父の顔を見た。

スン、と心が冷えていく。無表情になっただろうわたくしの顔を見下して、お父様が痛ましそうな顔をした。

「オーレンシア。すまないが、お前にもう侍女はつけられない。今後は護衛騎士がお前の身の回りの世話と、身の安全を受け持つだろう」
「え……？」

状況を飲む込めないわたくしの肩を、尚も父が撫でる。

頑張れよ、とでも言うように。

「最近、構ってやれなくてすまないな。今は仕事があればこれと詰まっているが、落ち着いたらゆっくり二人で食事でもしよう。では、すまないがもう行くよ」

「おまちになって、お父様……！」

言いたいことを全て口にする、父はすぐに踵を返してしまった。用件だけを伝えて、去っていくお父様。

引き留めても、止まってはくれない。

追い縋ろうとしても、宰相に行く手を阻まれた。

父の背中が、どんどんと遠退いていく。

（わたくしは、誰からも父王に愛されて——）

そう、幼い頃にお星様になってしまった大好きな母のぶんも、わたくしは父から愛されて、甘やかされて。

だからこそわたくしは誰よりも尊い存在で——

コンコンとドアがノックされて、ベッドに腰かけていたわたくしは顔を上げた。

それからぼんやりと窓の外へと視線を移して、緩慢な動作で首を傾げる。

先程までまだ朝の早い時間だったのに——今では随分と、日が高くなっていた。

「失礼します。姫様、いらっしゃいますか？」

男性の声だ。低く、張りのある声。

ドア越しでも美声だと分かるその声に、わたしは「ええ」とだけ答えた。

「失礼します」

「……え？」

わたしが居ると答えるなり、ガチャリとドアノブを捻って男が入って来た。

この、寝室に。一国の王女の寝室に。

信じられない。家族でも、結婚相手でもないのに。こんなこと、許されるわけがない。

「あなた、なんて事をつ！……!?」

慌てて立ち上がり、不躰に入室した男の顔を睨み付けようとして。目に入ったその容姿に、わたくしは衝撃を受けた。

サラサラとした色味の薄い金髪に、綺麗な形をした瞼。その中心の濃い青の瞳。眉の形すら美しく、鼻梁はスツと通っていて鼻が高い。

薄めの唇はほんのりと口角が上がり、魅力的なアルカイツクスマイルを形取っている。

——なんて、整った顔立ち。ふわふわとしたミルクティー色の髪と甘い顔の造形が絶妙にマッチしていて、わたくしは状況も忘れて見惚れてしまう。

だって、これ程まで容姿の優れた人間は見たことが無い。

その上、背が高く足が長く、姿勢も良い。

近衛の制服がよく似合っていて——ん？近衛？

「あ、あなたねっ!! お父様が言っていた、護衛というのは……！いきなり寝室に入るなんて言語道断よっ！すぐにお父様に言い付けて——」

「はいはい、その手は通じませんからねー。ほら、朝食もまだなのでしよう？もうお昼ですよ。早くリビングに行きましょうね」

「は……？」

ペラペラと喋りながらズンズンとこちらに歩いてくる男の姿を、

わたくしは啞然と見つめた。

一体、何が起こっているのか。サツパリ、分からない。

「よいしょ」

「きやああっ!？」

近いっ！と思ったらあっという間に抱き上げられた。

横抱きではない。幼子のように縦に抱き上げられて、危なげなく運ばれているのだ。

「なっ、何をして、ふけいっ！不敬よっ！」

「はいはい。ちゃんと食べなきゃ、健康に悪いですからねー」

男がスタスタと歩いている内にわたくしは寝室から運び出され、リビングへと身柄を移された。

誰かに助けを求めなければ！と忙しなく視線を滑らせるわたくしの目が、テーブルで止まる。そこには、湯気を立てている料理の

数々があった。

ふんわりと漂っている良い香りに、呑気な体がグウ、と空腹を訴えかける。

「お腹の虫も、もう無理だよーって訴えかけていますねえ。はい、座ってー」

「きゃあっ！あ、あっ、あなた……！」

椅子の上にわたくしの体を下ろし、怒りで震えるわたくしの手を勝手に取って。騎士はナイフとフォークを、わたくしの手握らせた。

なんだこの男。怒りが次第に呆れへ変わり、わたくしは未知の生物と遭遇した心地になる。

「めちゃくちゃ良いもの食べてますよねえ。まあ、王族だもんな。そりゃそうかー」

「……………」

許可などしていないのに向かいの席に着き、テーブルに頬杖を突いて勝手にペチャクチャと喋る護衛騎士。

これは——なんだ？

頭は混乱を極め、お腹はグウと鳴る。

握り込んだ拳の中にはナイフとフォーク。

（とりあえず——食べましょうか）

思考を放棄した脳が、生物的な欲求を埋めようと体に信号を送る。わたくしは魚のソテーをナイフで一口大に切り分け、パクリと頬張った。

「——おいしい」

ずっとグルグルとしていた思考が、目の前に広がる料理に集中する。

パク、パク。魚も、サラダも、スープも、パンも。次から次へとわたくしの口の中に消えていき、すっからかんだったお腹を少しずつ、少しずつ満たしていく。

「よかったですねえ、姫様」

にこにこしてこちらを見つめる騎士のことは、意図的に意識の外側に追いやった。

「頬っぺたが膨れて、仔リスちゃんみたいですわねえ。ふふ、怒りっぽい仔リスちゃんかあ。めっちゃくちや嚙まれそう」

彼は頬杖を解くと指を交差させて前に突き出し、ググツと伸びをした。それから力を抜くと、トマトを一切れ摘まんで、ひよいと口に放り込んだ。

「あっ！」

「わあ、甘……。こんな甘いトマト、初めて食べましたー」

勝手に食べて、勝手に感想を言っている。

なんだこの男。何度目かの疑問が浮かぶ。

わたくしの常識には存在しなかった、異常な存在だ。

わたくしは、一国の姫なのに。なんだこの不敬な態度は。

——けれど不思議と、もう怒る気にはならない。この短時間で、この男に怒り続けていたら身が持たないと察したとも言える。

「あれ？今度は怒って頬つぺたが膨れてますね？ふふ、えー。可愛いですねえ。頬つぺた押してぶしゅってしてあげましょうか？」

「くっ！少しは静かになさい！」

身が持たないと分かっているながらもついまた怒りを爆発させてしまった。そんなわたくしの前で、男がケラケラと笑っている。

チラリと左手を見れば、薬指には指輪が無い。

これだけ顔が良くて、女性からとてつもなくモテる騎士職なのに。

恐らくは二十代後半である現在も、未婚なのであろう。正直納得だ。

これで妻がいたら、その妻が大変過ぎる。

わたくしがその人の友人なら、心配して「別れた方がいいんじゃない？」と声をかけるだろう。

「ごはん、冷めちゃいますよ？」

「誰のせいで……!!」

またしてもムキーツ！と怒るわたくしを、まだ名前も知らない護衛騎士はカラカラと笑った。

2. わがまま姫は振り回される

サラサラと髪を梳かれながら、わたくしはむつつりと黙り込んでいた。

「姫様のお髪、めちやくちや触り心地がいいですねえ」

「……………」

おかしい。お髪が絡まっていますよと言われて、髪を梳かしてもらうことになったのまでは、まだよかった。

けれど何故こうして、わたくしは護衛騎士の膝の上に乗っているのだろうか。そして何故手で髪を梳かれているのだろうか。

こんなの、淑女と紳士の距離感ではない。それなのに、どうしてこんなことに――

サラ、サラ。現実逃避をしている最中にも、わたくしはずーっと、

髪を梳かれていた。

横向きに腰かけている彼の太ももは筋肉で硬く、絶妙に座り心地が悪い。

「お顔ちっちゃー。お人形さんみたいですねぇ」
「……っ」

不意に左から顔がズイツと迫ってきて、わたくしは驚いて目を見張る。

顔が小さいのは、お前の方では――

出掛けた言葉を、ギリギリのところで飲み込む。褒めるなど、癪だ。

そうして葛藤している間にもわたくしはジロジロと観察され、かと思えば、護衛騎士――ナイトは、ニカツと笑った。

「へへ、俺こう見えても、ドレスの着付けとか得意なんですよ。実

家に居た頃、五歳年下の妹をめちゃくちゃ可愛がってて。なーんでもお願いを叶えてあげていたので」

「ふーん。……えっ？」

それはつまり、わたくしもこの男にドレスの着付けをされるということだろうか？

——この、出会った初日に一国の姫を膝に乗せて髪を撫でている男に？わたくしが？服を着せ替えられるの……？

「わあ、こらこら。暴れたら危ないですよお」

「……!? ……!?!?」

お腹に腕が回り、横からギュツと抱き締められる。

そして何故か、耳裏に鼻を当てられて、クンツと匂いを嗅がれた。

「えっ、めっちゃ良い香り……」

「カツ、解雇！解雇ー!!」

お父様ー!!と叫ぶわたくしの体を抱えたまま、後ろの変態がケタケタと笑う。

ジタバタと全力で暴れてみせるが、圧倒的な力の差で抵抗がいなされる。

「俺を解雇しちゃったら、姫様ひとりになっちゃいますからねえ。解雇はできないですよー」

「かつ、かつ、うえっ!？」

するり、と左手で太ももが撫でられて。ビクンと大きく体が跳ねると、はあ、と耳に熱い吐息がかかった。

「俺ね。怒りっぽい女の子って、大好きなんですよ。キャンキャン吠える狂暴な小型犬みたいで」

「や、な、なにをして……っ!」

大きな手が、ねっとり。上から下へ、下から上へと、繰り返す

太ももを撫でる。

さわさわとドレスの生地が擦れる音が耳につき、感じたことのない感覚が背筋を昇っていく。

「ちゃんと舐て、可愛い俺のワンちゃんにしたいのに。いつも途中で逃げられる」

「きゃ、やつ、んん……っ！」

ぺろん、と首筋を舐められて、飛び上がる。

なんてことを……！と震えるわたくしのことを、ネイトはにんまりと笑って見ていた。

「でも姫様は……逃げられませんよね？ 貴女は貴女自身の身から出た錆のせいで、俺を遠ざけることなどできませんし」

「おとつ、お父様に報告するわ……！ お前がとんでもないケダモノで、貞操の危機がある」とつ」

うつそりと笑ってそう告げたネイトが、今度は困ったように眉尻を下げた。

頭を右に倒して、どうしたものかなと顔に書いている。

「うーんでも、それはですねえ」

まだ言い返そうとするネイトを、わたしは強く睨め付けた。

どうしてそんな横暴が通ると思っているのか——甚だ、疑問である。

「わたくしは、この国の王女なのよ。そして王であるお父様は何よりもわたくしのことが大切なの。だからあなたなんて、すぐに解雇に……！」

「んーんー」

わたくしがこうして正論を言っているのに、彼は左手で顎を撫でながら考え込んでいた。

しかしその手が再び、するりとわたくしの太ももを撫でる。

「ひゃっ」

「……まあ、俺はこう見えて人望があるんですよ。変態だと透けてはいますがね！」

胸を張ってそう主張するネイトが、太ももをなでなでしながらにこにこ笑う。

こめかみの辺りに額をグリグリされて、カアツと顔に熱が集まった。

「うっ、打ち首よ……！ 打ち首にしてみせるわっ」

「あーっ、そんなこと言っちゃうんですかあ？ 姫様、それはいけませんよー」

グリグリを止めて顔を離したネイトは、ムツとした顔をしていた。しかしすぐに、ニヤリと笑う。

「うーんやっぱり、ちゃんと調きよ——羨なきや、ですかね。それが俺に与えられた役目でしようし。ふふ、役得役得♡」

ペロン、と唇を舐められて。その衝撃にピシリと体を硬直させていれば——お尻にゴリツ♡と硬いものが押し当てられた。

数秒間パチパチと瞬きを繰り返して考え込み、わたくしはやっとそれが、男性の股間に生える逸物だと気付く。

「きやあっ」

「んー♡♡」

ちゅっ、ちゅっ、と何度も口の端に口付けられ、ジタバタともがいていとお尻にゴリゴリとソレが当たる。

「へんたいっ！変態!!」

「ふはあっ♡姫様、すごいですねえ♡なんかやることなすこと、俺のドストライクなんですけど♡♡」

可愛い♡♡なんて言いながら、ぎゅうぎゅうと抱き締めてくるネイト。

わたくしは目を白黒させながら彼の腕の拘束から逃れようと奮闘するが、長く逞しい腕は一向にほどけない。

「んううっ」

「あっ、可愛い……」

押し付けられるものが、足のあわいをトントンと小突いて妙な刺激が生まれた。

フルリと体を震わせれば、蕩けた濃い青の瞳がわたくしの顔を覗き込む。

「ええー姫様、本当に可愛いですね。ねえねえ俺と、結婚しませんか？絶対寂しい思いはさせませんよ」

「……………」

にここにこと優しく笑いかけられて、家族になりませんかとお誘いをされる。

そわりと、心の奥底がざわついた。

あなたと一緒になればもう、寂しくないの——？

そう問いかけようとして、ハツとする。本気にするなんて、愚かな。ただの言葉遊びに決まっているのに。

わたくしはいつの間にか開けていた口を、ぎゅつと閉じた。

「……わたくしの家族は、お父様だけですもの」

「あらあ。それは残念」

残念と言っておきながら、そこまで残念そうにしていない。やっぱり、本気ではなかったのだ。

ほんのりと悲しくなった心を抑え込んで、わたくしは違う風に考える。

これまでの言動から、誠実とは程遠そうだ。だから例え結婚したとしても、いつかは飽きられるだろう。

やっぱり、本気で口説かれるようなことにならなくて良かった。そして、こちらとしても本気にしてしまわなくて良かった。

「じゃあ、了承は今後ただくとして……まずはお体から、俺に慣らしていきましようねえ♡♡」

更に硬くなったように思える逸物をまたもお尻にゴリゴリと押し付けられて。悲鳴を上げそうになったわたくしの口に、ネイトはパクリと食らいついた。

* * *

硬く、安定感のある人間の椅子に座って、その胸板に凭れている。

そんなわたくしは後ろから伸びてくる手に、とんでもないところを探られていた。

右耳の裏には、高い鼻梁が差し込まれ——クンクンとひたすら、体臭を嗅がれている。

「やあっ、あんっ♡んん……っ」

バサリと盛大に捲り上げられた淡い桃色のドレスのスカート部分。足は大きく開いた状態で彼の足に絡み付かれて固定されている。

そしてその中心には、骨張った長い指が触れていた。

左右を紐で結ぶタイプの下着は床に落ち、お股の間からはくちゅくちゅと音が鳴る。

ねっとりとした指使いは巧みで——初めての感覚に困惑するわたくしを宥めるように、しっとり濡れた二枚貝のような場所を撫でていた。

「姫様、ご自分でここを触ったことは？」

「あ、あるわけ、ないじゃない……っ」

ブンブンとかぶりを振れば、髪でパシパシと顔を叩かれることを、背後の変態が喜んでいた。

もう。おかしなことばかりするから、口調が乱れてしまったではないか。

恨めしさ三割増しでキツく睨めば、トロリと蕩ける表情。

「ジ……ッ！」

不意にぬりゅ、と割れ目の上の部分を指で撫でられた。

鋭い刺激が生まれて、体が跳ねる。

「やら、そこっ」

「痛い？」

「ん、すこし……」

指先でするすると優しく撫でられているのに、ビリビリする。ピタリと彼の指が止まってホッと息をつけば、頭頂部に口付けが落とされた。

「んーっ、と」

「……？」

ゴソゴソと背後で何かを探る音がして、彼が動くのに合わせてわたくしの体も揺れる。キュツと眉根を寄せて耐えていれば、ネイトは「あった」と明るい声を上げた。

「まだ使っていない清潔なものなので、安心してくださいねえ」上品な白いハンカチーフを、そっとお股に当てられる。

「ええ……？ そんな、でも」

汚れてしまうわ、と彼の顔を振り向いて見上げれば、何故かとりと蕩ける瞳。

「姫様って、本来はそ・う・い・う・人・な・ん・で・し・よ・う・ね・え」

「え？なに、……きやあっ」

どういう意味なのか問いただそうとして。ハンカチーフの上からそろりとその場所を撫でられた。

走った刺激に、ビクビクと腰が戦慄く。

「ここ、クリトリスって言うんですよ。これから姫様のだーいすきな場所になるんですから、きちんと覚えておいてくださいねえ」

「んんっ、んくっ♡ふう、しらな、うんん……っ！」

右耳に息を吹き込みながら低く囁きかけるネイトは、人差し指と中指の間を開いた左手でハンカチーフを押さえ、反対の手でそのクリトリスという場所を優しく撫でる。

スリスリ、クリクリ。薄い布越しに、慎重に慎重に。強くしすぎないようにと注意して、彼はその小さな突起を撫で続けた。

「クリちゃん、ジンジンしちゃいますか？ 気持ちいいですね。ね、気持ちいい、気持ちいい……」

「あっ、アッ！ やだ、だめえっ♡♡♡」

彼の言う通りジンジンとしている場所を、ひたすらスリスリと撫で回される。

腰から下が、溶けてしまいそうな感覚。

頭が沸騰して、何も考えられない。

「ちーっちゃいのに、頑張って勃起していますねえ♡かわいい、かわいい。スリスリ、クリクリ♡♡」

「んんんっ！ ああっ、あッ！」

体が、おかしい。彼の指が動く度に勝手にビクビクと跳ねて、足のあわいにある不浄の場所が体内でぐねぐねとうねるように蠢いている。普段は意識すらしない、お腹の奥。激しく蠕動している場所

の奥の奥が、切ない疼きを訴えかけていた。

「やだっ、なにかくるっ♡こわいっ、こわいのっ♡」

「大丈夫、俺がついてますからねえ」

優しい声色。脳に直接吹き込むように耳元から囁きが流れ込み、わたくしは諸悪の根源を頼れる味方だと錯覚する。

「ずーっとお側で、姫様をお守りしますから」

「んんっ、んん……っ♡」

思わずキュッ、と彼の着ている服の袖を握れば、耳元でふっと笑い声が漏れた。

くりゅくりゅくりゅ——

ひたすら弄くり回されているクリトリスが、溶けてしまいそうだ。「俺は決して、あなたを一人になんてしませんから、ね。だから安心して、身を任せてくださいねえ」

「ふあっ、あッ！だめ、だめえ……っ！」

刺激に慣れてきたと判断されたからか、布地の上からキュムツ♡とクリトリスを摘ままれて、くにゆくにゆ♡と揉み込まれる。

「だいじょーぶ。怖くなんて、ないですからねえ」

「そんなこと、いつ、んあっ♡♡ひううっ♡」

にゆくにゆくにゆく……♡

芯を摘まんだ二本の指を交互に動かし、繊細な動きで小さなクリトリスが刺激される。

サラサラとしたハンカチーフに擦れ、ジンジンとして堪らない。

「ほら、体から力を抜いて？気持ちいいを、受け入れてください」

「あっ、ああッ♡♡んくっ、ん、あ、あっ♡♡」

ねっとり、右耳を舐め上げられて。それからすぐに、耳の穴に舌先が入り込む。

ぬちぬちと音を立てて穴を櫟り、やがてじゅぶり♡と振じ込まれる熱くぬめった感触。

「ひう……！ んんあッ♡♡」

ぐちゅぐちゅと耳穴をほじられながら、クリトリスがシコシコと扱かれる。腰はひっきりなしに痙攣し、視界でバチバチと光の粒が弾けていた。

ピン、ピンと指先で弾かれて。すぐにまたシコシコと擦られるクリトリス。そうしてしつこくしつこく、刺激を続けられている内に――わたくしは、真っ白に染まった。

「ああっ、んう、んゝゝゝっ！」

「……あは……っ♡♡」

左手では彼の袖を。右手では彼の腕を。ぎゅうぎゅうと握り締めながら、わたくしは大きな衝撃に飲み込まれた。

ヒク、ヒクと勝手に腰が前後し、割れ目の下にある穴がパクパクと開閉を繰り返している。

「ね、ねい、と……っ」

「ん、大丈夫ですよ。こわくない、こわくない。気持ちいいですねえ」

ナイトはあやすようにわたしの頭にちゅっちゅっと口付け、熱くなった突起から指を離して優しく肌を撫でる。

大丈夫、大丈夫。何度も何度もそう口にして、大きすぎた衝撃に涙ぐんでいるわたくしを宥めた。

「上手にイけましたねえ、えらいですねえ。今のが絶頂、または達するという、快楽の果てに辿り着く場所です。覚えておきましょうねえ」

「う、うん……」

乱れた髪を汚れていない左手で整えられて、ちゅつとこめかみに口付けられる。良くできましたねえと褒められて、宝物を扱うように頭を撫でられた。

「姫様が可愛いから、俺、もつと姫様のことが好きになっちゃいました。大好きですよお」

「……………」

甘い声に囁きかけられながら、温かな体に抱き締められる。

——心の奥底にあった、ヒンヤリと冷たく凍った場所が。いけな
いと思うのに静かに溶けていく。

「少しずつ練習して、気持ちいいのに慣れていきましょねえ？」
「……………うん」

素直に頷けば、にこにこと笑った彼にまた、頭を撫でられるから。
わたくしは前を向いたまま、微かに口角を上げた。

3. わがまま姫は尚も翻弄される

よく晴れた日の昼下がり。

午後のティータイムを楽しむわたくしの向かいの席には、優雅に足を組んで茶を嗜む護衛騎士の姿があった。

「そういえば姫様って、成人されてましたよねえ？」

「……は？」

なんだ、突然。と目を眇めて、わたくしは目の前のやたら顔が良
い男を見つめる。

なんだ？今朝になってあれも嫌これも嫌とドレスについて駄々を
捏ねまくったことを、根に持っているのだろうか。それとも、昨晚
の湯浴みの際に香油が気に入らないと怒り狂ったことか。

まあいずれにせよ。腹が立ったものだから、良い年こいてと言

たいのだろうか、この不敬騎士は。

——その他大勢と同じように。

「だったら何かしら？ わたくしは今年二十歳になった、良い大人ですわよ。それに何か、文句でも？」

「ああ、ですよ！ よかったー」

パチンと手を叩き合わせて明るく笑ったネイトに、わたくしは首を傾げた。予想していた反応と、あまりにも違い過ぎる。

「あ、文句なんてないですよ。寧ろその逆で、流石に未成年に手を出すのは犯罪ですからね。あれ、と思って胆が冷えましたあ」

ああそっち、と。それから、今更すぎないか？ と。

わたくしは途端に気が抜けて、怒らせていた肩を下ろした。

この男が普通じゃないことを失念していた。

他の人間と同じ反応をするわけなどないじゃないか。

「じゃあこれからも、どんどん手を出しても問題ないですねっ♡」

「問題は……あるでしょう……」

今度は、ガツクリと肩を落とす。

一国の王女に——というツツコミは、この一週間で飽きる程した。毎日毎日、抱き締められたりキスをされたり体に触られたりと、不敬のオンパレードなのだ。今更注意する気にもならない。

昨夜なんて「そんなに我が儘を言う子はこうだっ！」と浴室でしつこいほど胸の先を舐めしゃぶられた。

お父様に言いつけてやる！と度々脅しているのだが、毎回はいはいと流されている。

これではまるで、負け惜しみをする悪役のようにではないか。

「ふふ、可愛い姫様を見ながらお茶だなんて幸せだなあ」

「わたくしは許可を出していないのだけれどね……」

しかし何よりも不思議なのは、この男に触れてもまるで不快感が無いことだ。

世間ではどこから流行り出したのか、セクシャルハラスメント――縮めてセクハラなる言葉が浸透してきたようで、彼の行動はこれに該当するのではと思うのだが……。何故だか、受け入れている自分がいる。

それどころか日増しに体の感度が上がり、ふんわりと抱擁されるだけでお腹の奥が熱くなってしまう始末。

頭を撫でられればどんなに怒っていても気持ちは落ち着き、少しだけ眠くなる。

なんということだと愕然とすると共に、そこまで危機感を抱いていないのもまた事実。

大好きですよ。可愛いですねえ。俺と結婚してえ。

間延びした甘ったるい声が、どんどんと憤慨する気力を奪っていく。

（不思議な人——）

何故か嫌いになれない。そんな人がたまにいるというが、まさにこのネイトがそうだった。

「ねえシアちゃん」

「……？……、……——シアちゃんツ!?」

数秒間思考停止して、かなり経ってから。漸くそれがわたくしのことだと、気が付いた。

オーレンシア。だから『シアちゃん』。

だがあまりにも、あまりにも——

「お前、おま………もう、いいわ。好きに呼んでちょうだい」

「わあい♡シアちゃんシアちゃん♡♡」

にここにこデレデレと笑いながら、右手を伸ばしてテーブルの上に置いてあるわたくしの左手を握る。

わたくしは右手で痛む頭を押さえ、溜め息を吐いた。

「お父上にはいつご報告なさりますかあ？ 式はいつ頃になるかなあ♡♡」

「……結婚するとは、言っていないわ」

好きにさせていると指の間に彼の指が絡み付き、キュツ♡♡と握られて恋人繋ぎになる。

「じゃあ俺のちんぽを姫様おまんこに入れるのが先かなあ♡♡一番奥でたっぷり×××してゝいっぱい××××××××」

彼の形の良い唇からポンポンとお下品な言葉が溢れてくるが、優秀なわたくしの頭はすぐさま情報をシャットアウトした。

ペラペラペラペラと喋り続けるよく動く口から視線を外し、重い

溜め息を吐く。

変な男に、好かれたものだ。

どうしてお父様はわたくしにこんな男をつけたのか。

（お父様――）

最後に会ったのは、あの日だから――もう、一週間も経っている。
今度食事でもと言っていたが、あれから音沙汰は無い。

忙しいのは分かっている。だからわたくしのことなんて、きつと忘れてしまっているのだろう。

「あー考えてたら姫様のおまんこぺろぺろしたくなってきた！ 姫様
あ、おまんこくださいっ！」

「しっ、静かになさいっ！ きゃあっ!? 来ないで！」

立ち上がるなり腕をワキワキさせながら近寄ってきた変態によつて、わたくしのセンチメンタルな気分が吹っ飛ぶ。

「はあ、はあ、はあ……ッ！」

「あっちへ行って……っ！イヤー！変態ー!!」

あっという間に捕まり、あっという間に担ぎ上げられて。そうして運ばれた長椅子にて、わたくしは——小一時間ほど足のあわいを、舐め回されたのだった。

* * *

レースのカーテンが日光に照らされてそよそよと揺れる昼過ぎの寝室。天蓋付きベッドの上には、仰向けに寝ているわたくし。

大きく開いた足の間からは、ぐちよぐちよとねばついた水音が鳴っていた。

自分自身の鼻にかかったような甘い嬌声と、下方から聞こえるふ

うふうと荒い呼吸音。

ずるずると啜るような音が広い室内に響き渡る。

小さな粒を強く吸引する音をきっかけに、宙に浮く爪先がビクビクと跳ねた。

「ぶおッ♡♡あゝゝゝッ！」

既に熟知されてしまっているいいところを、長い指の束にゴリゴリと抉られて。この二週間で集中して開発されてきた体が、連続で何度も絶頂へと押し上げられる。

「ぷはあっ♡可愛い姫様おまんこ、だいぶ拡がりましたねえ♡もうちよつと頑張れば、俺のも入るかな？すっごく大きくて長さもあるから、楽しみにしててくださいねえ♡♡」

「あ……っ♡おっ、き……♡♡」

服の上から、ちよつとだけ触らされたことがあるソレは、確かに

ものすごく大きかった。

あれがこの狭い蜜道に入り込み、指でするようにズリズリと内壁を撫でたら——どれほど、気持ちが良いのだろう。

「……っ♡♡」

「あー、締まったあ♡えっちな姫様は、でかーいちんぽをズツプリ♡根本まで埋め込まれることを想像したのかな？」

きゅん、きゅん♡彼が破廉恥なことを口走る度に、わたくしの体内は束ねられた三本の指を食む。

「もうちょっと練習を重ねたら、ガツチガチのあつついちんぽをこのぐずぐずおまんこに挿じ込んで、ズンズン奥まで突いてあげますからねえ♡ぐちゅぐちゅパンパン、いーっぱい犯してあげますよ♡」

「……っ♡……っ♡♡」

指をねぶるように蠕動する蜜道を、それまで動きを止めていた指

がそろりと撫でる。

「それまでは、指ちんぽで我慢してくださいねー♡足りないぶん、ぷっくりクリちゃんをペロペロしながら何時間でもずーっとぐちゅぐちゅして差し上げますから♡♡」

「おっお……ッ♡♡♡」

話し終えるなり、ナイトはぢゅるんッ♡とクリトリスに吸い付いた。そして再び、ごりゅごりゅと膣内を抉りだす。

「きも、ちいっ♡ネイト、ねいとおっ♡♡クリちゃん、そこっ♡皮のなかあっ♡」

「ん、ふあい♡ここ、ん、ん……♡」

包皮と芯の間にぬるりと舌先が滑り込んで。するんと器用に皮を剥くと、ねぢねぢとひたすら芯を舐め回す。

「きゃああ……ッ！ イッ、くう……！ 」

あっという間に達してしまい、ビクビク痙攣する体を押さえ込まれて。わたくしは更に刺激を与えられる。

「お、お♡♡♡お、お♡♡」

膣内の感じる場所をしつこく狙われ、クリトリスは熱いとまで感じるほどの刺激をひたすら浴びせられる。

ビシャツ♡と堪らず溢れてしまったお潮が上着を脱いでいる彼のシャツにかかるが、気にした様子はない。

「いっく♡♡いくうっ♡♡」

「っ♡♡ふふ……♡」

尖らせた舌先で押し潰され、グリグリと強く擦られるクリトリス。膣内のへの刺激も、あまりにも悦くて。わたくしはたまらず二度、三度と絶頂を繰り返した。

「ひうう……ッ!! お、お♡♡おっ♡♡♡」

達したばかりで敏感なクリトリスをぢゅるるっ♡と強かに吸われ、またしてもビュッ♡と潮が吹き出る。

根本まで体内に埋まった三本の指はねぢねぢと膣壁を撫で続け、根本付近で泣き所を押していた。

「ひくっ♡ひくうゝゝッ!!♡♡」

絶頂を繰り返して暴れる体は、太ももを片手でホールドされるだけで簡単に押さえ込まれる。

運動などほとんどしたことがないひ弱な姫と、しっかりと体を鍛えている騎士。

抵抗しても、敵うわけなどないのだ。

「しん、じゃううっ♡♡♡」

「つぶは♡死にませんよお♡……あ、お潮だ♡♡」

顔を上げてにこにここと笑ったネイトが、吹き出る体液に気付いて

またすぐにわたくしの足のあわいに顔を寄せた。

そうして彼はビュッ♡ビューツ♡と断続的に溢れる潮を、恍惚とした顔をして受け取るのだ。

「ああッ♡♡なかつ♡おまんこ、きもちい……ッ♡♡♡」
「♡♡♡♡」

浅いところの泣き所を指先でタシタシと叩かれ、とにかく集中的に刺激されているから——お潮が止まらない。

口を開けたまま、受け取った体液を器用に飲み下して。ネイトの喉が、ゴクゴクと鳴る。

「おいひい……♡もつと、くらさい……♡」
「お、おッ!？」

噴出が止まるまで口で受け取り、飲み下し、と繰り返していたネイトが、全て吐き出してヒクヒクと震えている尿道口に口付ける。

「ひっ♡ うんん……っ！」

ちゅぱちゅぱと音を立てて、微かに震えるその場所を舐められ、吸われる。

こしょこしょと舌先で擦られる感覚はえも言えず、わたくしは嬌声を上げながら身悶えた。

「ん♡ シアちゃんはどこもかしこも、可愛いらしいですね♡♡」

「あ、ん、んう……♡♡」

股の間からうつとりと顔を見上げられ、ねちねちと内壁を撫でられながら今度は茂みの上に幾度も口付けの雨を降らされる。

「俺の指を一生懸命咥えるおまんこは綺麗な桃色で……陰唇すらプルプル♡」

「んあっ♡♡ や、そんなとこ……っ」

クリトリスから左右に続いている『陰唇』と呼ばれる場所をちゅ

るんと吸われて、丹念に舌を這わされる。

何が楽しいのか、じっと下腹部を見つめている濃い青の瞳が、キラキラと輝いていた。

「小粒なクリちゃんも慎ましくて愛らしい♡」

「——あああんっ！」

ちゅぱりと陰唇を解放されたと思えば、今度はじゅるっ♡と吸われるクリトリス。

唾液を塗りたいくり、もちゅちゅと口内で弄ばれる。

「んん、んー……♡」

「ああっ、アツ！ あっ♡らめ、それえ……っ」

舐め回しながらちゅるちゅるとしゃぶられ、一気に性感が高まる。それに合わせてこれまで止まっていた指が再び動き出し、内壁をぬるぬると擦った。

チラリとこちらの顔を見上げた双眸が、ゆるりと笑む。

気持ちがいいのなら、一回イツときましようねえ♡

言葉が無くとも、彼はそう言いたいのだと——わたくしは理解してしまった。

「ひっ、う♡♡ああゝッ！ああ、おお♡♡♡」

唇で皮を剥かれ、舌先をぷにりと押し当てられてコリコリと芯を転がされる。

そうしながらも膣内はひたすらにイイところを抉られ、擦られ、叩かれて。

達することと粗相をすることばかりが上達したわたくしのお股が、ぎゅんぎゅんと蠢きながらブシャツ♡と潮を吹いた。

「イツく♡♡イツくゝっ!!ごめ、なしゃっ♡♡ごめっ、なしゃあゝ

……!」

んいい♡♡とおかしな声を上げながら、わたくしは歯を食い縛って全身に力を入れ、絶頂に到達した。

ヒク、ヒクと蜜口が震え、痙攣しながら膣壁が蠕動する。

「はあ、ふう……っ♡んん、ん……♡♡♡♡」

「ひぎゅッ!? やあああ〜!!」

絶頂の余韻で更に敏感になっているクリトリスを尖らせた舌先で上下に素早く弾かれ、それを延々と繰り返される。

キツく締まる膣内はじゅぽじゅぽと指の束に擦られ、多量に分泌した愛液と少し前に流し込まれた彼の唾液が混ざって泡立つ。

「ふうっ♡ふうっ♡ふーっ♡♡」

「やあッ! やあ!! ごめなしやあ〜ッ!! ~~~~~♡♡♡♡」

ボタンボタンとのたうち、頭を振り乱して何重にもなって襲いかかって来る絶頂の荒波に抵抗する。

けれど力で押さえ込まれているわたくしに、強制的に注がれる快楽を受け取らないという選択は出来なくて。

わたくしはカクカクと腰を前後に揺すり、ヘコヘコと腹を上下させながら、感じて喘ぐことしかできない。

「ゆるして、ゆうしてえ……っ」

グスグズと鼻を鳴らしながら尚もわたくしを追い込む男を見下ろせば、青い瞳が至極楽しそうに弧を描く。

「シアちゃん、かあわいい……♡♡♡」

「お、お、お♡♡♡」

一言だけ喋って、またわたくしのクリトリスにむしゃぶり付く。

ごめんなさい。もうしません。反省してますと。そう繰り返しても、やめてくれなくて。

「らい、しゅきれすっ！らいしゅきいっ♡♡♡」

好きです大好きです。だからやめてくださいと。必死に言い募れば、にんまりと口角の上がつた口でより執拗に淫芯がねぶられる。

「ごめなしゃ、すきいつ♡♡しゅう、ううう……!?」

ギチ……♡ギチ、ぐちゅ……っ♡

周りの皮膚を引っ張られてポツンと存在を主張するクリトリスを——奥歯で噛まれている。

慎重に、慎重に。細心の注意を払いながら歯の表面を食い込ませているのだろう。

そのおかげで痛みはまるでないのだが——あまりにも刺激が、強すぎる。

「あ、あ、あ、あ……」

視界がブレ、勝手に体がガクガクと痙攣して。細かく何度も声を漏らしながら、わたくしは白眼を剥いて大口を開く。

力んでいる蜜道が勝手ににゅぐにゅぐと彼の指をしゃぶり、浅いところを指の根本でゴリゴリと抉られていた。

（まっしろ――）

視界も、脳内も。

真っ白で何も見えないし、何も考えられない。

「んふ……♡」

「ぴぎゃッ」

ぞろり、とざらついた刺激を与えながら、滑った奥歯がクリトリ
スから離れた。

「ほ、おおおっ♡♡♡」

「わあ、大噴射♡♡いただきま〜す♡」

ジンジン、ゾワゾワ……♡

解放されたのに、受けた衝撃があまりにも大きすぎて――

わたくしの体は、達している最中で残った余韻によって、もっと深い絶頂に堕ちた。

びゅうっ♡と吹く潮が、大きく開かれたネイトの口に注がれる。

「ひ……っ、ひくっ、ひう」

「んっ♡♡♡」

幸せそうな声を上げながらゴクゴクと体液を飲み下している護衛騎士と、しゃくり上げながら終わらない法悦に咽びなく護衛対象。

膣内は絶えずねぢねぢと撫でられていて、もう完全に腰が抜けていた。

真っ白な脳内に浮かぶ、こうなる前の出来事。

昼食に出たゆで卵が嫌だと彼に投げつけたわたくしと、珍しく怒ったネイト。

まだゆで卵だからよかったと、彼に当たってポヨンと跳ねた白い

球体をキャッチして、洗ってきた彼が皿の上に戻した。そして食べなさいと、わたくしを叱ったのだ。

ムツスリとそっぽを向いていたら溜め息を吐かれて。それに妙に焦ったわたくしが慌てて卵を食べたら、優しく頭を撫でられた。

そう、それから――

一件落着と思いきや、悪い子ですねと言われて寝室へ引きずり込まれた。そして今に至る、というわけだ。

「あ、ああ……、あ……」

白かった視界が、黒く塗り潰される。

にゆくにゆくにゆく♡

皮を剥いたまま周りの皮膚を引っ張られて固定されたクリトリスが、舌でめちやくちやに擦られているのに――感覚が遠い。

隘路がぎゅうぎゅうと指を締め付け、それでも尚イイところを刺

激されているのに、その感覚も遠い。

もう、限界が来る。

この二週間。彼の責めは日増しにより執拗に、より過激になっていった。

彼の体の中心では、大きなものが窮屈そうにズボンの布地を押し上げている。きっとあれを中に入れない限りは、彼の欲求は解消されないのだろう。

「あ、イぐ……ッ！」

伸びてきた彼の手に、ガチガチになって存在を主張している胸の先を弾かれた。

クリトリスを口で揉みくちやにされ、ピストンするかのように指を打ち込まれ、胸の先を弄られて。そうして今日の中で一番深い絶頂を味わいながら——わたくしは、意識を手放した。